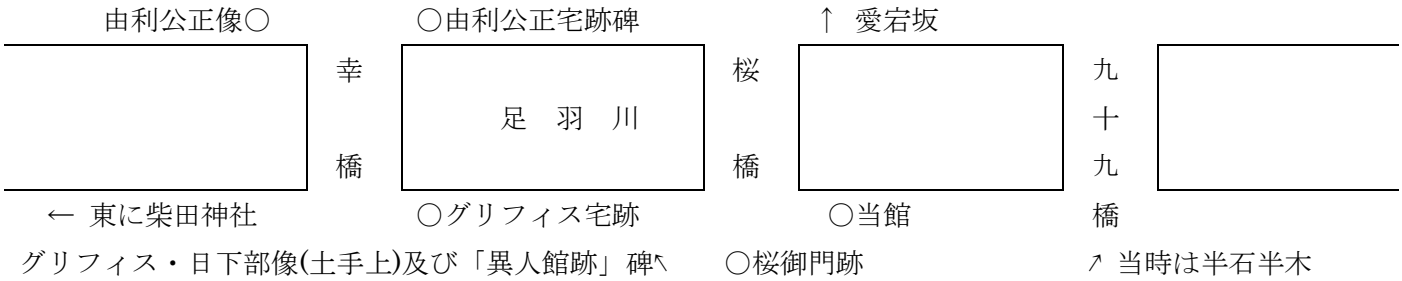
# グリフィスと三岡の出会い（展示「W.E.グリフィスと由利公正」より）

2016.3

徳川幕府がなくなった約三年後、福井藩に赴任した W.E.グリフィスは、明治維新という激動の時代を生きるサムライたちとこの地で交友し、新国家のヴィジョンを語り合いました。その代表的な一人が、由利公正（三岡八郎）です。［グリフィスの日記や著作には常に Mitsoka として登場するので、以下三岡と表記します。］

日本文化への関心が強かったグリフィスは、仕事の合間、積極的に城下町を散策し、自宅では二階のベランダから幸橋を行き交う人々を眺めていました。三岡八郎は、この橋を渡った南岸の地域、毛矢町で生まれ育ちました。幕末、それまで南岸の武士が登城するのに繰り舟を利用していた場所に、「幸橋」が架けられます。架橋に尽力した三岡の像が今、橋の南詰に立っています。福井で最初にグリフィスが暮らしたのは、この像の対岸を少し東に行ったところです。




※桜橋は、グリフィス来日時にはまだありません（架橋は昭和 11 年＝1936）。上の略地図で当館の左がお城のお堀であり、お城へ出入りする桜門が近くだったことから「桜橋」と名付けられました。図で門の左が城内、右が城下町です。当館は「浜町」にあります。グリフィス宅は城内の武家屋敷エリアに建てられた洋風の住宅で、その家が完成するまで、グリフィスは現在の柴田神社周辺にあった武家屋敷で暮らしました。

グリフィスの日記によれば、彼は何度も三岡の家を訪ね、家族とも親しくなり、打ち解けた楽しいひと時を過ごしたようです。また三岡の息子のひとりが、グリフィスの生徒でもありました。東京に転居した三岡に宛てて、グリフィスが福井から送った手紙（代筆）が二階に展示してありますが、それに対する三岡の返書の末尾には、「プロフェスリル・グリッフヒス先生」に息子の事を頼んでいる父親の言葉があります。この彦一（のち丈夫と改名）も日下部太郎に遅れる事五年、グリフィスの東京在住時に、留学のため十代で渡米しています。

「武士の中には三岡を殺すとおどしているものがいるという。というのは、三岡は一八六八年の功績で収入を得、また福井で長い間、改革と国家の進歩の中心人物だったからである。」 *The Mikado's Empire*

グリフィスが友人に関する物騒な噂を耳にしたのは、福井藩廃絶の前後。彼は奇しくも明治維新という革命の大きな山場に、福井で遭遇したのです。グリフィスと出会うまでの十数年間の三岡の経歴は、維新の軌跡そのものでした。

騎馬の藩士が桜門から出て城下を疾走する福井の正月行事「馬威（おど）し」。そこで、騎乗スキルを注目された際の三岡（当時の名前は石五郎）は満十七歳。以後、刀槍から西洋流砲術にいたるまで、各種武芸を修めた武士三岡八郎にとって、西洋諸国の脅威から日本を守ることは自らの存在意義に直結する責務だったでしょう。ただ、その責を果たすために必要なことを現実的に見極め、その道を臆せず着実に実践する点において、彼は非凡でした。

国を守るには軍備がいる。軍備の充実にはお金がかかる。質素倹約では限界がある。民間が富んでこそ資金も生まれるのだから、産業を興すべきだ・・・が、そもそも資金の当てが無い。三岡は自ら奔走して情報を集め、長崎まで足を運び、福井の民間輸出産業を育てる積極金融政策実現のため藩政府幹部を説得しました。財政再建に不可欠な信用の創造に一定の成果を得た要は、国への思いから商売のために駆けずり回るという異端の武士の姿そのものだったかもしれません。

もちろん福井一藩では意味がありません。幕府だけでもダメです。天皇のもとに国力を結集するため、福井藩と三岡八郎は悪戦苦闘しました。徳川幕府を守りつつ国家を変革するという難題は、藩内に激しい政争をもたらします。
朝廷を国家の最高権力と認識せざるをえなくなった幕府において宰相の座に就いた松平春嶽は、稀代の思想家横井小楠をブレーンとして、国際正義にのっとり、挙国一致の衆議を尽くす政治を実現しようと苦闘し、挫折しました。中央政局を打開するため、藩をあげて死中に活を求めるか、機を待つか、方途をめぐって藩士たちの議論は沸騰、エスカレートし、深刻な亀裂を生じます。結果、三岡は公職を追われて隠居謹慎、横井は故郷熊本へと去りました。

福井藩の軍備革新に勤しむ青年官僚だった三岡が、三十代を迎えて藩財政の立て直しに奔走していた頃、家庭の経済的事情で高校を中退したグリフィスは宝石職人として働いていました。その後聖職を志した彼は、奨学金を得て大学

に通います。やがて、ミカドの国のひとりの旧封建領主が国を守り産業を興すため、この若き見習い牧師の高潔で誠実な人格をみこむと共に、大学で修めた科学知識を必要として自分を太平洋の向こうへ教師として招こうとは、在学中の彼は夢にも思わなかったでしょう。福井藩からの留学生日下部太郎との出会い、という予兆はあったわけですが。グリフィスが日下部の学業を助けた数年の間に、福井藩主は将軍という主君を失ってミカドに任命された知事となり、三岡には雌伏から一転、幕府に代わる新政府の屋台骨を支える人材として乞われ、首都で死力を尽くす壮絶な日々がありました。

大学生のグリフィスが日下部太郎と相知る仲になった頃、三岡に再び活躍の場が与えられます。明治天皇の下、幕府に代わる新政府の看板を掲げた要人たちは、亡き坂本龍馬を介して知った越前の辣腕財政家に素寒貧の台所を預けました。それから一年有余の三岡の大仕事は、御誓文の起草も含めてよく知られるところですが、旧勢力を倒す戦争の遂行という非常な過渡期の財政を強力に遂行した責任者は、多くの敵を作って故郷へ退きます。それが福井の地において、グリフィスと三岡が親交を結ぶ機会をもたらしました。

母国の行く末を思って異郷に果てた日下部を知り、祖国を思って自分を招いた春嶽を知るグリフィスは、新しい日本のための自らのヴィジョンを三岡に熱く語りました。福井と中央、両政府での財政運営、革命の動乱による浮沈、高揚と失意を味わい尽くした四十代の三岡は、若きグリフィスにとって最も良き聞き手だったでしょう。三岡にとっても、安全保障と産業発展の基盤となる先進科学知識を福井に伝えるためやってきた二十七歳の青年教師は、待ち望まれた存在でした。会話ははずみます。

この頃の三岡は、藩の財政再建に再び成果をあげていたところであり、自信と共に自らの半生をふりかえることができたでしょう。この後も、東京府知事をはじめとする政府顕官、財界の重鎮として由利公正の足跡は長く続きますが、彼の人生における燃え盛る夏の日は既に過去といえます。一方グリフィスの長い人生は、まさにこれからでした。革命を生きた武士たちにめぐりあい、強い統一国家をつくるという彼らの思いの帰結として実現した廃藩置県を福井で鮮烈に体験した事で、グリフィスは日本の歴史研究に魅せられ、帰国後まもなく『皇国』を著して日米で高く評価されます。明治維新をきわめてポジティブにとらえた彼の記憶には、藩を滅ぼした革命の象徴三岡八郎を呪う声の一方で、時勢を受け入れて未来を語る少なからぬ福井の武士たちの姿がありました。

「これからの日本は、あなたの国やイギリスのような国々の仲間入りができます」 *The Mikado's Empire*

※文中、グリフィスの著書 *The Mikado's Empire*『皇国』からの引用は山下英一氏 訳『明治日本体験記』（平凡社東洋文庫）に拠りました。

| | 三岡八郎 | W.E.グリフィス関連 |
|---|---|---|
| 1829（文政 12 年） | 福井で出生。 | |
| 1843（天保 14 年） | 14 歳 | フィラデルフィアで出生。 |
| 1853（嘉永 6 年） | 家督を継ぐ。24 歳 | 10 歳 |
| 1856（安政 3 年） | 結婚。27 歳 | 13 歳 |
| 1860（万延 1 年） | 31 歳 | 高校を中退。17 歳 |
| 1862（文久 2 年） | 幸橋、竣工。33 歳 | 19 歳 |
| 1863（文久 3 年） | 蟄居。弟が家を相続。34 歳 | 内戦に出征。20 歳 |
| 1865（慶應 1 年） | 息子彦一が家を相続。36 歳 | ラトガース大学に入学。22 歳 |
| 1867（慶應 3 年） | 福井で坂本龍馬と話し合う。38 歳 | 日下部太郎、ニューブランズウィックに留学。 |
| 1868（明治 1 年） | 新政府の財政・金融政策を担う。39 歳 | 25 歳 |
| 1869（明治 2 年） | 中央政府を辞職。福井藩に帰国。40 歳 | 大学卒業。神学校に入学。26 歳 |
| 1870（明治 3 年） | 由利姓を称する。41 歳 | 日下部、逝去。来日。27 歳 |
| 1871（明治 4 年） | グリフィスと出会う。<br>福井藩が福井県となり、東京へ転居。<br>東京府知事に就任。42 歳 | 福井に暮らす。28 歳 |
| 1872（明治 5 年） | 外遊中、府知事罷免。43 歳<br>彦一のアメリカ留学。 | 東京へ転居。29 歳 |
| 1874（明治 7 年） | 政府に民撰議員設立を建白。45 歳 | アメリカへ帰国。31 歳 |
| 1876（明治 9 年） | 47 歳 | 『皇国』出版。33 歳 |
| 1909（明治 42 年） | 逝去。享年 79 歳 | 前年、日本政府により叙勲。 |
| 1927（昭和 2 年） | | 妻と共に福井を再訪。84 歳 |
| 1928（昭和 3 年） | | 逝去。享年 84 歳 |

（西暦基準。その年の満年齢で記載。）